

南アルプス（白根三山）におけるケージ内保護方法の実施状況について

1. 実施概要

近年のライチョウの減少傾向の要因として、孵化後の雛の生存率は降雨量、気温による影響が大きいことが指摘され、また猛禽類、キツネ、テン、オコジョ、ハシブトガラス等による捕食による影響も考えられている。ライチョウの保全に資する技術検討の一環として、孵化後の雛の減少を食い止めるために、乗鞍岳周辺において孵化直後のライチョウの家族を一定期間ケージ内で保護するケージ内保護方法¹の技術確立を実施し、一定の成果が得られている。

平成 27 年度は、個体数の減少が著しい南アルプス地域の北岳において実施に着手し、ライチョウ保護のための移動式簡易ケージを用いた固定式ケージへの誘導及びその後のライチョウ家族の保護を実施した。

2. 実施状況

(1) 実施場所

南アルプスの北岳山荘南西側で実施（図 1 参照）。



図 1 ケージ位置図

¹ これまで「ケージ内保護法」の名称を使用してきたが、H27 年度検討会より、名称を「ケージ内保護方法」に統一することとした。



写真 1 北岳山荘から中白根岳周辺

(2) ケージの規格

ライチョウの家族を固定ケージへ誘導するため、移動式簡易ケージを利用した。移動式ケージは木製で、幅 90cm、奥行き 67.5cm、高さ 45cm の大きさである。固定ケージも木製で、サイズは中型（幅 180cm、奥行き 360cm、高さ 120cm）および小型（幅 120cm、奥行き 240cm、高さ 90cm）の 2 種類を用いた（図 2 参照）。

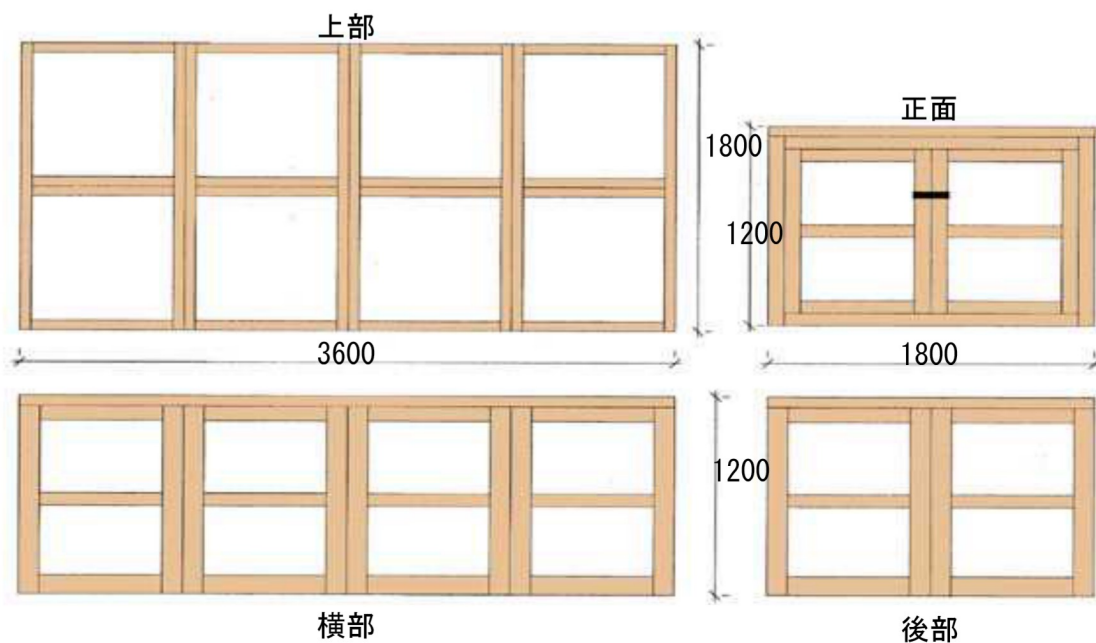


図 2 ケージの例（中型）

(3) ケージ内保護の状況

ケージ内保護は、平成 27 年 6 月 28 日から開始し、7 月 19 日に放鳥（22 日間）。

- ①平成 27 年度は、2 家族を移動式簡易ケージで中型及び小型ケージに誘導した。当地のライチョウのなわばり数が少なく位置も遠いため、2 家族の保護が限界と考えられた。また、風衝地であり風が強く作業環境としては厳しい条件であった。ケージは全体を網で覆い、内部はライチョウの保護のためナイロン製のネットを張っている。



写真 2 ケージ周辺の風景



写真 3 中型ケージの外観

- ②固定ケージに誘導した後は、天気の良い日は家族をケージから出し、付近の高山植物を採食させた。ケージ外では原則として 2 人が付き添い天敵などに注意し、夕方にはケージ内に誘導した。今回は解放時の見守りの確保等を考慮し、1 家族ずつ交互に外に解放した。また、悪天候の日が連続することが多く、風が非常に強かった。ケージに保護してから 3 週間を経過した 7 月 19 日に放鳥を行った。



写真 4 ケージ外での家族観察



写真 5 ケージから出る家族

- ③ケージ内では、周辺の高山植物（クロウスゴ、イワツメクサ、オンタデ等）を採取し、プランターに植栽するとともに枝葉を束ねた形で家族に与えた。



写真6 ケージ内の様子

（４）ケージからの放鳥後のモニタリング

放鳥した２家族について、ヒナはともに６羽の孵化が確認されていた。一方の家族はケージ保護前までに１羽減り、小型ケージ保護実施中に１羽がオコジョに捕食されたため、放鳥時は６羽と４羽であった。その後は、月１回程度で調査を行っている。８月はヒナを確認できたが、９月、１０月は２家族とも確認できなかった。

また、自動撮影カメラ１０機をケージ近く及び「けもの道」に配置し、放鳥後のライチョウ家族及び天敵などの様子を１０月１５日まで継続観察した。これまでシカ、サルやテンなどが確認されている。



写真7 自動撮影カメラ



写真8 カメラ周辺の風景

（５）その他

- ・南アルプス北部においては１９９０年代末頃から、「お花畑」をはじめとするシカの食害が報告され、その後１０年間で急速に食害範囲が拡大・深刻化している。シカの成獣は、４～５kg/日の植物を採食するため、高山植物にとってもライチョウにとっても脅威となっている。（シカの対策について、南アルプス国立公園ニホンジカ対策検討会が１０月２３日に開催される。）